

## 2 水稲有望品種「きぬむすめ」の特性と施肥法について

### ねらいと成果

兵庫県では、「売れる米づくり」として、良食味品種（「コシヒカリ」「キヌヒカリ」「ヒノヒカリ」）の作付けと生産を推進してきた。しかし、最近、特に「キヌヒカリ」において、夏の高温による乳白粒・腹白粒等のいわゆる白未熟粒の発生により品質低下が多くみられる。そのため「キヌヒカリ」の一等米比率は2006年度から3年連続で40%以下と低迷して、生産者価格と意欲に悪影響を与えている。この「キヌヒカリ」の品質向上対策として、栽培法の改善に取り組んできたが、効果は限定的であったため、新品種「きぬむすめ」について検討した。

その結果、「きぬむすめ」は、「キヌヒカリ」よりも成熟が遅い「日本晴」熟期であるが、良食味で品質も良く、栽培適地も広いことが判明した。また、「きぬむすめ」の良食味、高品質を維持して、かつ安定多収を得るための施肥法について、2007、2008年度に検討し、窒素成分で基肥4-穂肥2kg/10aが一つの基準になると思われた。

### 内容

栽植密度を㎡当たり21.2株とし、窒素施肥量について、基肥-穂肥を0-0、4-0、4-2、4-4kg/10aの4区を設定して、生育、葉色値（SPAD-502で測定）の推移、収量、タンパク質

含量、検査等級、食味を比較した（検査等級、食味は2007年度単年度のデータ）。

両年度とも、いずれの区においても、倒伏は発生しなかったが、いもち病が穂肥4kgでは発生した。葉色値は穂肥0の区では出穂後に大きく低下した（図1）。

穂肥の有無によって、収量に差がみられた。穂肥量が多くなると多収となるが、玄米タンパク質含量が高くなった（図2）。また、いずれの区も検査等級は1等、食味は良食味の指標とされる「ヒノヒカリ」と同程度となった。

以上の結果から、「きぬむすめ」においては、基肥4-穂肥2kg/10aの窒素施肥量で、玄米タンパク質含量を7%未満（兵庫県の良食味基準）、検査等級1等で収量540kg/10a程度は確保できると考えられた。

### 今後の方針

目標とする、収量540kg/10a、玄米タンパク質含量7%未満、かつ検査等級1等となる栽植密度と施肥法を引き続き検討するとともに、省力化のための緩効性肥料の施用についても検討し、普及に当たっての参考資料とする。

松本 純一（農業技セ・作物・経営機械部）  
（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）

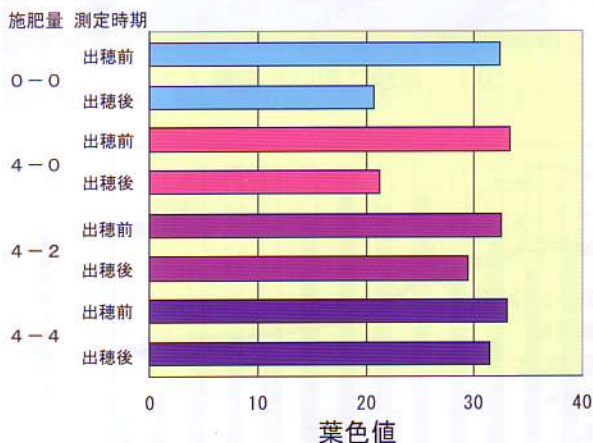


図1 施肥量の違いによる「きぬむすめ」の葉色値

(注) 葉色値の測定は、出穂前は出穂前20日、出穂後は出穂後23日に、行った。穂肥は出穂前15日ごろ施用した。

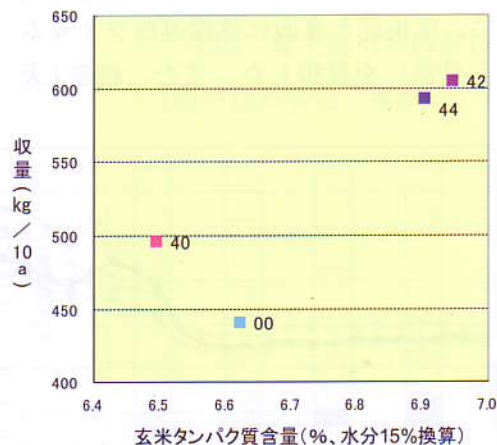


図2 施肥量の違いによる「きぬむすめ」の収量、玄米タンパク質含量

(注) 00~44は基肥穂肥の施用量を示す。

(例) 42は窒素成分基肥4kg/10a、穂肥2kg/10a施用を示す。